

# クロパの妻マリアと十字架のイエス

ヨハネ 19 : 16 - 27



司祭 ヨハネ 井田 泉

2018年3月30日

聖金曜日

奈良基督教会にて

わたしたちは今、2000年前の人たちと同じように、主イエスの十字架のもとに集まっています。

今、朗読されたのはヨハネ福音書による主イエスの受難物語ですが、ルカ福音書にはこのように書かれた一節があります。イエスの死の直後です。

**「23:48 見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。」**

このように、十字架の出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った人たち。その中にはふたとおりの人々がいたのではないのでしょうか。一つは、この残酷で衝撃的な出来事に立ち会ったとしても、やがてその記憶は次第に薄れて過去の事柄となり、結局はイエスの十字架と自分の人生の間には特別な関係が生じなかった人たちです。

もう一つは、この十字架の出来事がそれを目撃した人の生涯に決定的な影響を及ぼすことになった人たち。十字架にかけられたイエスがその人の心に刻みこまれて、イエスと自分とをもちや切り離すことができなくなった人たち。十字架のイエスなしの人生などもはやあり得なくなった人たちです。

わたしたちはこの礼拝が終われば、2000年前の人たちと同じように胸を打ちながら帰って行くでしょう。そしてその後はどうなるのでしょうか。願わくは、今述べた後者のようでありたい。十字架のイエスがわたしたちに宿ってくださって、もはやそこから離れられないような、そのようなイエスとの出会いと結びつきが与えられることを願います。

今ご一緒に関心を注ぎたいのは、十字架のそばにいた人たちの中のひとり、クロパの妻マリアです。ヨハネ福音書の中でこのように言われていました。

**「19:25 イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。」**

ここには4人の女性がいます。そのうち3名の名はマリアです。イエスの母マリア、クロパの妻マリア、そしてマグダラのマリア。この二人目のクロパの妻マリアは、少なくとも名指しでは聖書全体のここにしか登場しません。その夫の名前がクロパであった、ということ以外何もわかりません。けれどもこのマリアも、おそらくガリラヤからイエスに従ってきた人であり、イエスの最期を見届けようとするほどにイエスを愛していた人でした。そのクロパの妻マリアに関心を注いでみたい。そしてこの日、クロパの妻マリアが経験したことを、しばらくたどって確かめてみたいと思います。

クロパの妻マリアは、他のマリアたちと共に、ローマ総督ピラトの裁判の席、「敷石」という意味の「ガバタ」というところから、死刑場「ゴルゴタ」まで、大勢の群衆にまじってイエスについていきました。

イエスは疲れ果てた状態で十字架を背負わされ、人々の嘲りと罵声の中を進んで行かれます。イエスを嘲りののしる声は、クロパの妻マリアの胸に突き刺さります。

ゴルゴタに着くと、人々はイエスを十字架につけました。

「18 また、イエスと一緒にほかの二人をも、イエスを真ん中に  
して両側に、十字架につけた。19 ピラトは罪状書きを書いて、  
十字架の上に掛けた。それには、『ナザレのイエス、ユダヤ人  
の王』と書いてあった。」

ローマ総督ピラトは、イエスとユダヤ人に対する嘲りと見せしめのために「ユダヤ人の王」と罪状書きを記しました。しかしクロパの妻マリアたちは知っています。その罪状書きのとおり、この方こそがほんとうのほんとうの王なのです。ローマ皇帝ではなく、その代理人の総督ピラトでもなく、大祭司アンナスやカイアファではなく、この方こそがわたしたちを導き治められる王にして救い主。このイエスが殺されても、また自分たちが殺されても、そのことは変わりません。

ふと気づくと、兵士たちは、はぎとったイエスの服を四つに分けてそれぞれが自分のものにしたばかりではなく、下着までも分けようとしています。目の前で人が釘付けにされ、血を流して殺されようとしているのに、そのようなことが平気のできるのが信じられません。彼らは、下着は縫い目がないので、裂かないでくじ引きにしました。

しかしそのような浅ましいことをする兵士たち、またイエスを「殺せ殺せ」と叫んだ群衆だけが邪悪なのではなりません。むしろ、彼らをそのようにさせている偉い人々、権威と権力をもって立派に振る舞っている人たちこそが、ほんとうにあくどいのです。

「19:25 イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。」

興奮、嘲り、罵声、憎しみ、殺意……これらのものに取り囲まれていても、彼女たちはイエスから離れようとしません。彼女たちは悲しみに打ちのめされていたとしても、決して敗北してはいません。最後の最後までイエスを信じ、イエスを支持して、決して悪しき力に屈しないのです。

そしてクロパの妻マリアは、十字架から発せられたイエスの叫びを聞きました。

「28 渴く」

「29 そこには、酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった。人々は、このぶどう酒をいっぱい含ませた海綿をヒソブに付け、イエスの口もとに差し出した。30 イエスは、このぶどう酒を受けると、『成し遂げられた』と言い、頭を垂れて息を引き取られた。」

十字架の上から発せられたイエスの声を、クロパの妻マリアは忘れることができません。「渴く」「成し遂げられた」。クロパの妻マリアの耳に、その心と体にイエスの声は反響し、彼女の中に生きつづけます。

イエスが息絶えられてかなりの時間がたったとき、兵士たちがやってきて、槍でイエスのわき腹を刺しました。すると、血と水がわき腹から流れ出ました。それをクロパの妻マリアははっきり

と見ました。イエスを取り囲んでいた群衆は、すでにほとんど姿を消していました。

やがて夕暮れが近づいた頃、意外にもアリマタヤ出身のヨセフがイエスの遺体を取り降ろしたいとピラトに願い出て許可をもらい、遺体を取り降ろしました。そこに、かつて夜、イエスを訪ねてきたことのある老教師ニコデモがやって来て、アリマタヤのヨセフと共にイエスの遺体を新しい墓に葬りました。アリマタヤのヨセフもニコデモも、イエスの死刑を決定したユダヤ人最高法院の議員でした。その議員の中に、それまで自分がイエスの弟子であることを隠していた二人が、今、イエスの弟子であることをあらわにして、危険を顧みずにイエスを葬ります。それを MARIA たちは見つけ、見届けました。

受難物語はここで終わりです。けれどもわたしはここからひとつ大胆に想像してみたい。このクロパの妻 MARIA のことです。

ルカ福音書によれば、イエスが十字架にかけられてから 3 日目の日曜日の午後、エルサレムを出発して山の下町の町エマオに向かって道を下っていく二人の人がいました。二人はこのエルサレムで起こった痛ましい出来事を語り合いながら道を歩いていました。そのひとりの名はクレオパです (ルカ 24:18)。クレオパとクロパ。似た名前です。Cleopas から”e”を取れば Clopas です。クロパとクレオパ。調べてみるとこの二つの名前はもともと同じ

であるらしいのです。たとえばマリアとメアリーが元々同じであるように。

そこで想像してみるのです。あの十字架のそばで、イエスの死を見つめていたクロパの妻マリア夫クロパとはクレオパのことであったと。あの十字架の場面では、夫クロパは身を隠しており、クロパの妻マリアは悲しみに耐えて十字架のそばに立ち続けていた。イエスを捕らえて殺した悪しき力に決して屈せずに立ち続けていた。

あのマリアとクロパ（クレオパ）の夫婦が、今、エルサレムから道を下って山の下町の町エマオに向かっています。すると一人の人が後ろから追いついてきて道連れになりました。その人はエルサレムで起こってこの重大な出来事を知らなかったようなので、二人はそれを話して聞かせました。

それをじっと聞いていたその人は、やがて聖書の話をし始めました。救い主は苦難を経て栄光に入るはずではなかったのか、と。

日が沈もうとする頃、エマオの家に着し、二人はその人を招き入れます。その人はパンを取って賛美の祈りをし、それを皆に配ってくれました。そのとき、わかったのです！ それがイエスであることが。

クロパの妻マリアの心と耳に強く残って響き続けているあのイエスの叫びがよみがえってきます。

「渴く」

ただあの時イエスは口が、喉が渇いておられたのではなく、このわたしを、わたしたちを愛し求めておられた。イエスは死んでも、わたしたちを決して見捨てることはなかった。渇き求めておられたのはわたしのこと、わたしたちのことであった。

### 「成し遂げられた」

たとえ自分たちが無力であっても、無理解であっても、イエスのほうはずでに必要な全てのことをあの十字架の死においてなしてくださったのだ。わたしたちの救いのために必要なことは、あそこで成し遂げられた。

わたしたちはマリアであり、わたしたちはクロパです。わたしを求めてイエスは渇かれ、わたしたちの救いのためにイエスは十字架の上で成し遂げてくださった。

聖金曜日はわたしたちのためであり、復活日もわたしたちのためのものです。

悲しみと絶望と滅びをイエスは十字架において引き取って、その十字架から不思議な喜びと希望と命が湧き出しています。十字架から光が差してわたしたちを照らしています。